

発表の仕方

桂田 祐史

2007年2月6日

1 はじめに

一般に発表を聴く人、与えられた時間を認識するのが大事。今回は解析系の卒研発表会なので、解析系の4年生と教官が主な聴衆であり(3年生などもいるかも)、時間は1人10分(質疑応答時間込み — ただし例年あまり質問されることはない)。

2 発表の方法

発表の仕方(何をを使うか)で、考えられるのは次の4つ。

- (1) $\text{T}_\text{E}\text{X}$ で書いた資料をプロジェクターでスクリーンに映す
- (2) PowerPoint で書いた資料をプロジェクターでスクリーンに映す
一部 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ を利用することも可能
- (3) OHP シート(または普通の紙)に書いた資料を OHP プロジェクターでスクリーンに映す
- (4) 黒板を使う
(いずれの場合も、3,4 ページ程度の要約を配ることは可能なので、複雑な式やグラフなどはそれを見せよう)
 - $\text{T}_\text{E}\text{X}$ の場合、Windows の `dviout` を使うか、PDF にしてから Acrobat Reader を使うか、`xdvi` を使うか、色々選択肢がある。
 - 今回は時間的な制約から (4) は難しいと思われる。
 - 絶対にやめた方がよい(と桂田が信じている)のは、複数の方法を併用することである。切り替えに時間がかかるし、見づらいことが多い。
 - (3) は今となっては「古め」の方法だが、その場で何かを書くことも簡単だし、案外便利である(もっとも昨年度の桂田研では誰も採用しなかった)。
 - 数式などが少ない場合は (2) もお勧めだが、数式が多い場合は面倒かも知れない($\text{T}_\text{E}\text{X}$ の方が楽だ)。もちろん $\text{T}_\text{E}\text{X}$ を併用する方法までマスターすればその問題はない。
<http://www.math.meiji.ac.jp/~ee98032/> に「 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ Point の紹介」というのがある。

3 資料の準備

- 1 ページあたり 1~3 分と言われている。どんなに速くても 1 ページに 1 分はかけないと聴いている方は理解できない。「10 分なので 10 ページが目安」と考えるべきである。
- 1 ページに一つの話題だけを書く。一つの話題が 1 ページに収まらない場合は「論理的に」分割して書く。ページを「またぐ」ことは出来る限り避ける。1 ページごとに見出しをつけるくらいのつもりでいるのがよい。
- 「大きめの文字を使う」のが鉄則。横長に使うのが普通。PowerPoint ならば黙っていてもそうなる。手で書くときは A4 のシートに 1 cm 角で書くのが相場である。TeX の場合は、適当なスタイル・ファイルを使う。桂田は Foiltex というのを使ったことがある (<http://www.math.meiji.ac.jp/~mk/labo/2004/testfoiltex.tex>)。
- 表紙、問題の説明、分かったこと (結論) は絶対必要。将来の課題みたいのもあると良いかも。
- 聴衆は一般人なので、さぼれないところも多い。
- それ以外の時間でどこまで肉付けできるか。浅く広くするよりは、工夫したところを重点的に。
- 内容を練るには案外紙と鉛筆と消ゴムが有効。
- 事前のシミュレーションで時間を測りながら作戦を立てる。1 時間講演ではないので、シミュレーションはたくさんできるはず。

4 発表時の注意

- 聴衆に向けて喋るか、またはスクリーンを見ながら説明。セリフの原稿は内容を練るために作っても良いが、本番では決して見ない。スクリーンに移っていることがメモがわり。
- 質問が来るのは興味を持ってくれたということなので歓迎する (「やったあ」くらいに考えること)。
- 万一面倒な質問が来たとき、親分 (指導教官) が出て行くこともあるが、桂田は一切それをやらない主義である。